

# 花まつり

平成23年4月第1週放送

お釈迦さまの誕生は、花に彩<sup>いろど</sup>られていました。母、マーヤー夫人が、アショークという花を手で折ろうとした時、陣痛<sup>じんつう</sup>が起こり、お釈迦さまが生まれたといわれます。誕生の地ルンビニーも、さまざまな花が咲き匂っていたといえます。

花はなぜ美しいのでしょうか。

紅<sup>くれなゐ</sup>や紫、黄色や純白などの、きれいな色で咲いているからでしょうか。

風に揺れる繊細な花弁や、美しい曲線を描くその形があるからでしょうか。

それらは、花の美しさを成り立たせる大切な要素ではあるけれども、それだけでは足りないような思いがいたします。

花はなぜ美しいか。

それは、花は枯れていくものだからではないでしょうか。

咲いている時だけが花なのではありません。種から芽が出て、茎がすくすくと伸び、花を咲かせます。やがて、花はその色を失い、しぼみ、土に帰っていきます。その全体が花なのです。

花は、その「いのち」のひと時ひと時を、ただ自然に生きていきます。成長の時も、大輪の花を咲かせる時も、色を失い枯れていく時も・・・。

花は枯れていくから、言葉を換えれば、常に変わり続ける「いのち」だからこそ、美しいのではないのでしょうか。

花に彩られて誕生したお釈迦さまの生涯、最後の言葉が、

『すべての「いのち」は移り変わるものである。

怠<sup>おこた</sup>ることなく心をこめて生きなさい・・・』

というものでした。

お釈迦さまの生涯は、若かりし時も、さとりを開かれた時も、人生の大半を費<sup>つい</sup>やした布教の時も、老いの時<sup>え</sup>も、病を得<sup>のぞ</sup>、死に臨む時も、常に変わり続けるご自身の「いのち」を、自然に、丁寧に、心をこめて生き続けたのです。

誕生<sup>たんじょうぶつ</sup>

仏のまわりを花で囲み、甘茶を濯<sup>すす</sup>ぎ、お釈迦さまの生誕<sup>せいたん</sup>を寿<sup>ことほ</sup>ぐ「花まつり」は、お釈迦さまに、とてもふさわしいものであると思います。